

朝を ひらく

仮定法*if*の世界には夢がある。もし僕が鳥だったら……。日常にはないもの、でもあればどんな風の世界がかわるのだろうか、とつい思ってみたくなる。「非日常」の風景。

空飛ぶ飛行機はいつたいどのようにして生まれたのだろうか。ライト兄弟が1903年に、いや、最初はまず願望であったはず。人間も鳥のように空を飛べたら、という*if*の世界があったからこそ、その後エンジニアがその思いを形に表せたのである。

30代のとき「英会話」なるものを教えていた時があった。現

ゼロからの出発

永田 円了
真国寺住職



実に起こったことを英語にすることは、それなりにできる生徒が、非日常を語る仮定法になるとなかなかできない。それもそのはず、日本語には仮定法の表現が乏しいのである。英語の*if*で表現される「反実仮想」の発想は、日本語の、特に話し言葉の中で使われることはまれである。日本語と比べ、英語の仮定法の表現は豊富である。豊富なコトバがあるということとは、

その時は不可能と思われるも、なんとか実現したいという切なる思いがそこにあるからである。

30年前、真国寺の跡を継いで6年目、まだ頭の中でもややもやとしたものがあった。19代目の役割が自分に果たせるのだろうか。寺役と教職をてんびんにかけてやうとする気持ちはまだ働いていた。そんなとき何かスーと頭をかすめた。もし、お寺をゼロから始めることができたら。

新しくものを創り上げていくことは、人をワクワクさせる。今までのものをそのまま背負おうとすると重くて嫌になる。よし、寺を建て替えよう！ 形が

変われば、意識も変わるはず。

この非現実的なる願望がその1年後に実現できたことは、まさに奇跡であった。資金はどうする。周りの理解をどう得よう。教員をしながらそんな時間があるのか。45年の空襲で全焼した寺を40年かけてコツコツと建て増してきた亡父が許してくれるのか。いま思うと切りがないほどの障壁があった。しかし不思議なことに、当時のワクワク感は何だったんだろう。一日一日が充実していた。3千人の方々に寄付を募るダイレクトメールも手書きで出した。建設業者との打ち合わせも日々こなし

た。

87年5月、真国寺が落慶をむかえた。新しくなった伽藍の前に、新たな責任感と奇跡を呼ぶ*if*のエネルギーが、住職の身体全体にみなぎった。

*if*の力身体に満つ